

令和元年度第3回学校運営協議会 概要

嶺北高等学校

日 時 令和2年2月18日(火)18:00~19:45

会 場 嶺北高等学校第一会議室

◇委員名簿

No.	区 分	氏 名	出席	No.	区 分	氏 名	出席
1	学校関係者	山田 憲昭	○	6	地域住民	澤田 智則	
2	保 護 者	古谷 雅之	○	7	地域住民	豊永 大五	○
3	学校関係者	岩本 誠生	○	8	地域住民	山下 由子	
4	学校関係者	高石 清賢		9	地域住民	宮本 久義	○
5	学校関係者	松岡 寛		10	地域住民	山首 尚子	○

1 開 会

2 協 議

《学校評価について》

事務局より、本年度の取組成果と課題、自己評価の説明のあと、学校関係者評価について、以下の意見が交わされた。

○学力の向上

【宮本委員】

- ・改善している。良い数値かどうかは別として、生徒、教職員の努力が形となっている。

【古谷委員】

- ・読書量を増すための取組として、新しい本を購入してはどうか。

【事務局】

- ・希望をとって、年3回購入している。

【山首委員】

- ・D3層対策に時間を費やしていると思うが、取組内容は？

【山田副会長】

- ・小テストやノート点検に時間を割いている。

【山首委員】

- ・学習障害などの原因により、就職が困難な生徒に対しては、地域が支援できる。保護者が認めれば、学校と情報を共有した上で、ソーシャルワーカーに手伝ってもらい社会とのつながりを構築できる。

【岩本委員】

- ・学力の状況が把握しにくい。どの状態がどうなったのかがわかりにくい。

【山田副会長】

- ・わかりやすい資料作りを心がける。

【宮本委員】

- ・評価のガイドラインは無いのか？アンケートの回答の様な自己申告による数値はどうなのか？

【山田副会長】

- ・ガイドラインは無い。教科によってバラつきがある。教科特性をどうやって反映させるかが課題。

【岩本委員】

- ・学校評価アンケートの結果について、相対的に教員の評価が高く、学校に対する思いが表れている。しかし、設問「中高一貫教育は機能している」の数値は低い。改善策は？

【山田副会長】

- ・授業への教員相互乗り入れ、部活動の合同練習、挨拶運動、各種行事など、連携が目に見えるものもあれば、見えにくく、実感しにくい部分もある。工夫の余地はある。

【豊永会長】

- ・中高一貫教育に取り組んでいる他校の状況はどうか。

【事務局】

- ・7年前の調査では、嶺北は良い方。

【豊永会長】

- ・全県下的に低評価なら抜本的な改善に取り組むべき。

【岩本委員】

- ・中高一貫教育の効果は期待したほどではない。

【豊永会長】

- ・以上の意見を踏まえ、B（目標を概ね達成）評価とする。

○社会性の育成

【山首委員】

- ・社会福祉教育の分野で、学校と業界を繋ぐための調整役をしている。
教員の負担を軽減するためにも地域と繋がる機会を増やすことが必要だと考える。

【山田副会長】

- ・早い段階で社会と繋がる必要を感じる。地域に出て多様な活動に取り組んでいる影響か、アンケートによると社会性は高い。

【豊永会長】

- ・高校生に対して情報端末の使用規制は必要だろうか。

【古谷委員】

- ・スマホ等の使用は家庭の判断。
- ・地域に出て多様な課外活動を行うなど、社会性育成の場が提供されている。社会性の向上は学力の向上に繋がる。

【豊永会長】

- ・以上の意見を踏まえ、B評価とする。

○チーム学校

【山首委員】

- ・働き方改革について、10年間中学校を見てきたが、とにかく忙しい。
先生の思いや声を聞いてみたい。頑張っていることや躓きを知りたい。

【豊永会長】

- ・委員と先生が意見交換できる場の設定を望む。

【古谷委員】

- ・いじめが考えられない良い学校ということがわかった。

【豊永会長】

- ・県独自アンケートの「学習すること自体が面白い」は、なぜ、面白いと回答する生徒が少ないのか。

【山田副会長】

- ・県下的に低い。学校アンケートの「分かりやすい授業が多い」は高評価を得ているのだが。

【宮本委員】

- ・面白いと感じるのは、自分から知りたいという思いが芽生えてから。

【豊永会長】

- ・働き方改革には、「やり方を変える」「見方を変える」などの取組に

よって、気づきを得ることが必要。

【岩本委員】

- ・学校魅力化の取組により、連携中学校以外の入学生が、令和元年度 10 人、2 年度も 10 人前後になると思われるが、新設する寮は定員を 30 人ほどに設定している。寮生が 30 人を超えたときの対応などを考えておく必要がある。

【山田副会長】

- ・連携中学校生徒とそれ以外の割合を 7 : 3 で進めたい。また、連携中学校からの進学割合は 80% を目指したい。

【山首委員】

- ・中国地方のある大学では、手厚い指導により、国家資格の高い合格率を実現して大きな魅力になっている。嶺北高校も少人数の手厚い指導が魅力。こうした魅力を保護者に発信できると良い。
また、前出の大学では、先輩が後輩に体験談を伝える場が設けられていて魅力の発信ができています。嶺北高校の魅力が地元の子どもたちにも発信できたら良い。

【岩本委員】

- ・土佐町では、経済産業省の指定を受けたフリースクールが実証実験を始め、11 人の小学生が通っている。小学校に通う生徒との学力差がどうなるのか心配する。

【豊永会長】

- ・以上の意見を踏まえ、B 評価とする。

《新教育課程について》

事務局より編成作業中の教育課程について、第 2 回協議会の意見を踏まえて再検討した結果、「総合的な探究の時間」は各学年 1 単位とする案の説明のあと、以下の意見が交わされた。

○嶺北探究（総合的な探究の時間）について

【山首委員】

- ・企業では、取り組んできたことを重視する傾向にある。
- ・10 年間中学校を見てきた。自ら企画し、考え、行動することが重要だと思っている。
- ・嶺北高校の魅力化の鍵は探究活動にあると思う。実体験を増やしてあげたい。

【古谷委員】

- ・学力より社会性が大切。塾で学力の向上を図るなどして探究活動を大切にしたい。

【豊永会長】

- ・嶺北高校の特色として、探究の時間を増やすことはできないものか。

【事務局】

- ・これまでの「総合的な学習の時間」には、キャリア教育に関連する行事を組み入れていたため、探究活動に費やせる時間が多く削られていた。「総合的な探究の時間」では、行事を組み込まない事としたので、年 30 時間以上の時間を確保できる。
- ・新学習指導要領では、必修科目も増加することから、週 1 時間の授業で生徒と教員がしっかりとやりとりして、休みの日や放課後等で外に出て活動することも想定している。

【山首委員】

- ・大学に行くより、高卒で社会性を磨く方が効果が高い。

【岩本委員】

- ・普通科高校なので、「総合的な探究の時間」を多くするのは疑問に思う。大学進学も視野に入れて、しっかりと勉学に取り組ませる必要を感じる。
- ・探究活動については、同じ思いを持った者が集い、クラブを作って活動するのも一つの選択肢ではないか。

【山田副会長】

- ・7 時間目を増やすことは、ボランティア活動などの時間を奪うことになる。
- ・地域の子供達には、普通科高校に進学するのなら、嶺北高校を選んでもらいたい。現行の教育課程では、理系希望者を逃がしている。
- ・教育課程検討委員会では、「総合的な探究の時間」を増やす議論もあったが、週 1 時間、3 年間という案に至った。週 1 時間でも、3 年間で 90 時間は自分が探究したいことに取り組める。

【宮本委員】

- ・1 時間以上の活動はできないのか。

【山田副会長】

- ・運用面では、臨時時間割により、2 時間続きの授業を実現できる。フィールドワークなどの充実が図れる。

【豊永会長】

- ・「探究に注力したから進学率が向上した」など、生き残っていくためには特色を持つ必要がある。

【山首委員】

- ・探究活動は、主体的でなければならない。

【山田副委員長】

- ・「総合的な探究の時間」には全ての教員が関わる。将来の進路に繋がるよう仕組み作りを進める。

【岩本委員】

- ・探究の取り組みをとおして何を学んでいくのかが重要。まずは週 1 時間でいく。

【豊永会長】

- ・週 1 時間の探究の授業は、地域に乗り込んでしっかり展開していく。それ以外の時間（科目）でどう取り組むのかが無いと委員は納得しない。
- ・本協議会は、探究に力を入れて進めてもらいたいという思い。
- ・探究の進め方を来年度早々にも示して欲しい。
- ・来年度は 5 月に第 1 回の会議を開きたい。

3 閉 会